

平成30年度入試の情報開示（出題意図・解答のポイント）について

(別紙様式)

入試の区分	一般入試（前期日程）
学部学科等	人文学部 人文学科
教科・科目名	国語／国語総合
正解・解答例 又は出題 (面接)意図	<p>(出題意図・解答のポイント)</p> <p>1</p> <p>本問は、中西進「塔を成さしめた上人」（『文学の胎盤』平成28年10月）をもとに出題されている。「塔を成さしめた上人」は、幸田露伴の小説『五重塔』について、作品執筆当時の時代背景を踏まえながら筆者なりの解釈を述べていくものである。幸田露伴にとっての現実と『五重塔』の物語世界を重ねながら論じられており、それらの対応関係の正確な理解が求められる。また、個々の登場人物に順に焦点を当てながら小説全体の解釈に進んでいくという論の展開を丁寧に辿っていくことが、解答を導き出す重要なポイントとなる。</p> <p>問1 選択肢式の試験では確認できない漢字の正確な「読み」と「書き」を見る。</p> <p>問2 筆者が説明している二項対立的な論理を明確に理解しているかを見る。</p> <p>問3 『五重塔』という物語世界内の話題と、その物語世界外の話題の対応を正確に理解しながら読解できているかを見る。</p> <p>問4 文章全体の論理的な展開を正しく捉えられているかを見る。</p> <p>問5 二人の登場人物がどのように対比されているかを問うものであり、文意に即して与えられた字数で的確に記す力を見る。</p> <p>問6 抽象的された表現の内実を具体的に文章から読み取り、与えられた字数で的確に記す力を見る。</p> <p>問7 慣用句の知識を見るときともに、文章の内容を理解して文脈的に相応しいものを選択できる力を見る。</p> <p>問8 空欄に、文中から適当な言葉を選び出す問い。キーワードとなっている言葉を理解しているかを見る。</p> <p>問9 文章全体で筆者が主張しようとしていることについて、与えられた字数で的確にまとめる力を見る。</p>

『源平盛衰記』巻第三十五の「巴関東下向の事」の段（物語日本史大系第四巻所収）により出題した。問題文本文は、河原の合戦に敗れて北陸に逃れようとする木曾義仲に従っていた巴が義仲に説得されて戦場を去り、木曾に戻った後鎌倉で処刑の直前和田の義盛に請われてその妻となって一子を儲け、和田一族が滅びた後越中に至ってその生涯を閉じるまでの経緯を辿るものである。出来事を淡々と描きながら劇的な巴の半生を象っている。平易な文章で出題に難がないと判断したが、読解を助けるため必要に応じて注を施した。

設問は、巴が鎌倉に出向き処刑されるべきところを和田の義盛により助命されるに至る一連の叙述を読み取り、特に助命をめぐるやりとりについて、理解の度合いを見るという形で行った。

問1 義仲の巴への戦場から去らせようと説得する言葉を〔 〕でくくり、巴に肯わせる理由を捉えさせる問いである。「この事」を義仲の死と理解することがポイントとなる。

問2 文中の「主命」とは誰の命令か問うことで、人間関係を押さえ巴の行動を明確化することを意図した。

問3 文中「女房、公達」とは誰のことか問うことで、この語が前出の「妻子」と同一人であることを理解し、人間関係を整理することで内容理解を促す設問である。

問4 文中「主の敵」が誰かを文中の言葉で答えることによって巴の立場を理解させ、「母」とは誰かを答えることで、巴をめぐる出来事の流れを読み取らせることになる。

問5 和田義盛の願いを却下する「大将殿（頼朝）」の言動「『女なれども無双の剛の者、打ち解けまじき』とて、森の五郎に預けらる。」を口語訳させる問いである。主語が「大将殿（頼朝）」であるとした上で、助動詞の意味用法を踏まえて訳すことが求められる。解答を通して頼朝側の巴処刑の理由を押さえることができる。

問6 和田の義盛が「申し預からん」と願い出た理由を問う設問である。前の文章「和田の小太郎これを見て、『事の景気も尋常なり。心の剛も無双なり。あの様の種を継がせばや』とぞ思ひける。」をうけての「申し預からん」であることを捉えることが鍵となる。この解答により巴を助けようとした義盛の心の内を理解することができる。

問7 文中、なればの「なれ」、あらんの「ん」、叶うまじの「まじ」、仰せられけるをの「られ」「ける」の五つの助動詞のうちいずれか四つについて、それぞれの意味用法の説明を求めることで、文法の基本

	<p>的知識を問うものである。</p> <p>問8 「義盛相具して候ふとも、僻事更に在るまじ」を口語訳し、また、義盛がこのように言上する根拠を明らかにすることを求める問いである。</p> <p>口語訳には「相具」す、「僻事」の内容、及び助動詞「まじ」の意味を捉えることが求められる。言上の根拠としては、注に示した事情を踏まえて、和田の家は祖父以来主君頼朝のために命を捨てる覚悟を持ち、一族こぞって頼朝に忠義を尽くしてきており、一族の主君に尽くす誠心により、義盛が巴と夫婦になっても間違いはないという主張を理解することが鍵となる。</p>
備 考	